

# 英語教員のアップデート

—what/howではなく whyを見つめなおす—

佐藤 剛

## 1. 授業が変わる、さて教員は

大学入学共通テストや外部英語検定の導入等の影響から英語4技能に関する関心が高まっている。

受験制度の変容によって、「英語の授業」が変わると表現されることに違和感がないわけではないが、これまで以上に英語4技能の力の育成に迫られ、英語の授業が変わっていているのは間違いない。

これまでの授業はリーディングに重きが置かれていた。これからはリスニングだけでなくライティングやスピーキングの力もつけなければならない、というのはよく聞かれることであるが、では我々教員はどのような授業をする必要があるのだろうか。

また、このような流れの中で、英文法不要論なども出てきているし、反対に正しい英文法をしっかりと身につけさせる必要があるとして、これまでにあった受験英文法指導をより強くしたような指導も見受けられる。

ICT機器の導入によって、授業の幅が広がったこともこのような流れを加速させている。今でも毎週のように、多くの企業や学校主催でICT機器を使用した授業、教育に関するセミナーが開かれている。もちろん、その多くが有意義なものであるし、私自身、そういったセミナーに参加させていただくたびに多くのことを学ばせていただいている。

だが果たして、そういった授業法をそのままトレースして、効果は上がるのであろうか。「うちではこれはできない」「同じようにやってみただけで生徒の反応が悪かった」などの声がセミナーで聞かれることもある。これはICT機器を利用した授業が難しいわけでは決してない。教員が自分自身をモディファイし、アップデートできるかの問題である。なのだが、なかなかどうして「学校」とか「教員」というものはこの手のことが苦手である。

授業、学校へのICT機器導入をきっかけに、私自身のアップデートにつながればと思い、自戒の念

を込めてこの文章を綴っていきたい。

## 2. ICT機器の導入は大きな変化、ではない

さて、ICT機器の導入で、自分の授業スタイルや方向性を大幅に変えなければならないと感じ、その状況に危機感を持つ先生方も多いと思う。

ICT機器導入について、授業方法の大幅な変更を要する、とは私は考えていない。授業方法についてはこれまでやっていたことの延長線上で展開していくことをおすすめする。

しかし、ICT機器の導入で手に入れたバッファのような時間や「隙」で生徒に新たなアプローチができればよいのではないだろうか。

次の章では授業にICTをひとつまみ、と言ったお手軽なアプローチをお伝えしたい。こんなことなら自分でもいくらでもできる、と思われるかもしれないが、そのくらいからのスタートでちょうどよいと思っている。

## 3. 手軽なICT導入TIPS

単語・熟語・表現・文法などの基本的な学習については、ICT機器を使った学習は効果が高い。こういった基本的な事項はインプット・インテイクが十分にされるために単作業を根気強く反復していく必要がある。単語帳や文法問題集の学習は、物自体の使用感ある姿が確認できる分、達成感はあるものの、単語や問題の順番を変えられない以上、まじめに反復すればするほど、「順番通りに暗記できてしまったのか、きちんとインプットできているのか」ということが曖昧になる。

その点、アプリを利用した学習は演習の順番を自由に設定できる。テキスト通りのフェーズをクリアしたらランダムに演習するフェーズへ移行する、ということを行うことができる。この単純反復とランダム反復を自由に行き来できるというのがア

ナログではないこと、のメリットである。

また、小テストのデータ配信は、プリントの印刷、枚数の過不足、回収の手間といったものを省いてくれるし、先に用紙を配られた生徒が勇み足で中身を見てしまうことも防いでくれる。テストの開始や終了を揃えることも容易である。もちろん、お使いの機器やアプリ、プラットフォームで設定をどこまで細かくできるかは変わってくるが、そう大きくは変わらないはずだ。

英文を扱う、ということになると真っ先に思い浮かぶのは黒板などに本文を板書する代わりに本文を投影することで板書の手間を省く、といったことであろうか。もちろんそのメリットは大きい。タブレットなどから画面に解説を加えてもよいだろうし、黒板やホワイトボードに直接投影し、チョークやマーカーで解説を加えても、これはどちらでもよいだろう。

ただ、私が英文を投影するのであれば、おすすめしたいのは英作文の授業での活用である。

生徒が英作文を行う場合、日本語と英語の構造の違いによる誤答や日本語の読み取りミスなども散見される。和文和訳を行ってから英作文を行うのだ、という指導も有効だが、そもそもから和文和訳、構造把握につまずく生徒にはこちらが手本を示しながら英作文を指導するとよい。

この場合、文の骨組みとなる主部・述部といった部分と修飾語句を分けて提示し、最終的に1つの文として完成させることができる。

たとえば、「寺社仏閣で有名な京都に、出張で行くことになった」という日本語を英語に直す場合、

(1) I am going to Kyoto on a business trip.

と骨組みを作り、

(2) Kyoto is famous for its temples and shrines.

(2a) which is famous for its temples and shrines.

と書き換え、また、この(2a)を(1)に組み込む場合、コピー&ペーストして、

(3) I am going to Kyoto, which is famous for its temples and shrines, on a business trip.

文の流れをスッキリさせるには、

(3b) I am going to Kyoto on a business trip, which is famous for its temples and shrines.

という流れを1つの文を消さずに、また新たに書き起こすこともなく、説明ができるのは、ちょっとし

た便利さだが、大きなメリットである。それぞれの文を並べて比較する、ということも手書きで進めるには少し億劫だ。

スピーキングの授業において、スピーチ原稿を書く、という場合も文やパラグラフを移動させることが容易なので、パラグラフを変えることで伝わりやすさがどう変化するかということを生徒に体感させることもできる。まったくの余談ではあるが、たった1文字の送り仮名のミスのために作文用紙の大半を消しゴムで消す、というような悲劇も生まれないことは、精神的にも英文を書く際の手助けにもなると思っている。

何かと批判されることもある web 翻訳であるが、活用するには自分の表現したい日本語を英語に翻訳しやすい日本語に和文和訳することができる能力が必要である。これは手軽にできる英作文の練習だと私は考えている。

また、録音アプリに自分の英文音読を吹き込み自分で聞き直す、というスピーキングの学習方法もあるが、音声認識し文字起こしをしてくれるアプリに自分の英語の音読を吹き込み、英文がちゃんと文字起こしできているか確認するという発音の学習もおすすめだ。「ネイティブ発音信仰」も大切だとは思いますが、この学習方法ではネイティブ発音かどうかは別として、その音声が“English”として判断されるか、ということが確認できる。発音に対してのハードルが高い生徒は多いが、まずはここをクリアすることを指導のゴールにしてもよいだろう。

#### 4. プレタポルテな教育

前章で述べたような方法は、おそらく先生方でも聞いたことがあったり、すでに共有されたりしていることでもあると思う。先にも述べたが、ICT化による授業の変化は小さいところからでよいと思っている。授業の方法についてはこういった小さなアップデートを進めていきたい。

では、授業はどうなっていくべきか、ということだが、それは「教育の脱近代」であると私は考える。授業では40人程度の生徒たちに決まった内容を決まった時間で行う。生徒たちはその内容を決まった期間までに定着させる。40人の生徒たちは一律に同じ知識を吸収していくのだが、果たしてそれでよいのだろうか。40人の平均的によくできた生徒を

育てるといことは、これまでのように目指すべき道がある程度一定方向に収まる社会的には正しい道であったし、望まれたことでもある。

しかし、現代のように多様化した社会において、これまで通りの教育では様々な齟齬を解決しきれない。このような流れの中では、生徒の持つモチベーションの大小や得意・不得意、理系志向・文系志向といった様々な背景、多様性を理解し、生徒個人が「なぜ学ぶか」ということを解決していく必要があるだろう。ICT 機器の導入はその手助けになるものだ。

学校や教員は、学習に対して「what(何を)」「how(どのように)」という部分には強みを持っている。その力にプラスして生徒個人が持つ「why(なぜ学ぶのか)」に答える力を持つことが重要である。これからは産業の世界と同様で、少品種大量生産の時代から、多品種少量生産、もっと言えばオーダーメイドとまではいかなくともプレタポルテのような教育の方向性を持つことが重要なのである。

学校授業では、まだまだ YouTube のようなものがなかった時代には、教員が映像装置の代替として活躍していた。そこでは、疑問があって「一時停止」することも「巻き戻し」することも、易しいと感じた内容を「早送り」することも適わなかった。しかし今では、その全てができてしまう。そのような背景に立てば、よく話題に上がる「学校の授業は役に立たない」の見え方も変わってくる。「授業内容」それ自体を必要とする生徒と必要としない生徒がいるので、その意味では「学校の授業は役に立たない」のかもしれない。

生徒の多様性を保持したまま、これまでの学校と教員の強みを活かすならば、教員は授業では「内容」を教えるのではなく、「学び方」を教えるのがよい。「内容」それ自体の重要性を全体に押しつけるのではなく、「学び方」を教える。個人の設定しているゴールに向けて、知識獲得に限らず必ず何かを学ぶ必要があるので、このスタンスは必要ではないだろうか。この教育は、生徒が何かを学びたい、と思ったときに真に役立つ教育ではないだろうか。

これまでの強みを存分に活かし、「学び方」を教え、学力としては「スタートラインに立てるレベル」がリーズナブルなところであろうか。

## 5. 教員のアップデート

では、生徒個人が持つ「why」に答えていくにはどうしていけばよいか。私は教員のマインドセットを teacher(教える人)から conductor(導く人)に変えていくことが必要だと考えている。

ある一定のゴールへ全員を足並み揃えて進ませるのではなく、生徒個人が設定しているゴールへ向かえるよう手助けをしていくことがこれからは増えていくだろう。

幼稚な道徳論としての「ワンアンドオンリー」ではなく、本当の意味で「ワンアンドオンリー」な人材＝スペシャリストが相互に手を取り、スクラムを組んで社会を形成していく時代にこれからはなっていくことが予想されるので、学校においても生徒個人への対応がこれまでよりも求められるだろう。

生徒が「なぜ」学ぶのか、ということを理解したときは、本当に学びのスピードが速い。教員は敢えてジェネラリストとして、「学び方」を教える際に様々なコンテンツを放り込む。誰かが反応すれば、それを逃さず、個別に追加のコンテンツを渡してみる。もちろん、そこに興味を示さなければ渡したものは引っ込めて構わない。学びが速い生徒には、先に進むことを認めてよいだろうし、学びが遅い生徒には行きつ戻りつ学習量を増やしていける教材を渡していけばよい。全員が同じペースである必要がある場面もあるのが現状であるが、そのベーシックな部分を欲張らず本当にベーシックな部分を設定してもよいだろう。

学びの必然性の有無によって、スピード感、ペース配分が違うので、敢えて「発信ベース」の授業、もっと詳しく言えば「エッセイライティング」か「スピーチ」の授業をおすすめしたい。敷居が高く敬遠されることもしばしばだが、ICT を活用し、「why」ベースの学習を進めるのには、非常に適したスタイルだと私は思っている。そこで、私が勤務校で行っているスピーチの授業を紹介したい。

## 6. Why を追いかける授業

私は勤務校で英文法を教える際は、教科書ベースではあるが、非常に基本的かつ頻度の高い項目に絞って授業を展開している。そのようにすることで、早い段階で教科書は1周できるので(秋頃に大体の項目が終了する)、何度も既習項目について、授業

内で復習できるし、コミュニケーション英語の授業とリンクさせるなど項目を行きつ戻りつできる。

ベーシックな文法が浅く入ったところで、スピーチの授業を始めていく。

#### ①生徒個人の興味ベースで作成する

テーマは様々だが、「自分の趣味」「影響を受けた人物」「学びたい学問」など生徒個人人の興味関心を他者に説明する、というテーマが主である。

#### ②時間設定以外に厳しいルールは課さない

スピーチなので、原稿を見ての朗読はもつての外だが、その他には時間制限(多くは4分程度)くらいしかルールは課さない。小道具や写真など色々で生徒が用意できるようにしている。

#### ③プレゼンのテクニックについては教えすぎない

生徒たちは英語以外の授業でも様々な場面でプレゼンを行っている。そのようなものと無闇に反復しないように、という考えもあるが、生徒に「伝えるためにはどうしたらよいか」ということを考えさせる余白を与えている。

以上のような簡単なポイントしかあげられるものがないのだが、おもしろいことが起きる。

#### ①文法を自主的に学び始めた

自分の伝えたい内容をしっかり伝えるためには自分の英語が整っていないといけなく、ということを実感し、問題集の学習の時よりも私への質問が増えた。

また、関係詞を使い1文で表現するか、話しやすさを重視して2文に分けるか、ということなども考え始め、パズルとして英文法を見るのではなく、言語として英文法を見始めた。

#### ②語彙の吸収欲が上がった

専門用語以外にも、色々な基本的語彙を知り、使いこなす必要に迫られ、ただ単に丸暗記するだけではなく、使い方や使用場面にも注目するようになった。

#### ③発音に注目するようになった

クラスメートに自分の英語を聞かれる、ということから、発音に注意する生徒が増えた。リスニングや音読の際の集中力は増してきている。

#### ④リスニングの意識が上がった

スピーチを行うクラスメートの英語を真剣に聴

き、理解しようと努めていた。スピーチの授業はやはり負荷の大きいものである。この苦楽を共にしたクラスメートのスピーチを適当な気持ちで聴ける生徒は多くない。

#### ⑤「なぜ」について考えることが多くなった

どうしたら伝わるのであろうか、ということを考えながら生徒たちは原稿を仕上げていく。おもしろいからおもしろい!ではなく、今はこの内容に興味のない他者にもおもしろさをわかってもらうにはどうしたら良いか、を考えると、生徒たちは細かいテクニックではなく、「なぜ」自分はこのことに興味を持っていて、他者に伝えたいのだろう、という根源的なところまで考えを広げていく。他者に伝えるために、自分自身についての理解を深めていくのだ。「なぜ」おもしろいのか、自分の進路などについてスピーチさせると、生徒の原稿準備は英語よりも進路学習に比重が大きくなるので興味深い。

## 7. 教員にも why を

生徒たちは先にあげた①~③、①~⑤を行きつ戻りつしながら、原稿を仕上げる。文法の授業、作文の授業、と進めていたときよりも遥かに学びの速さと深さが増した。

スピーチの授業によって「なぜ文法や語彙を学ぶか」という問いに生徒自ら「適切な文法や語彙を知っていると自分の興味関心を伝えやすくなる」という答えを出すことができる。だから、文法や語彙を学ぼう、というモチベーションにつながる。一方的な授業ではこのモチベーションは生まれづらい。

生徒には「スタートラインに立てるレベル」を一斉授業で求め、あとは生徒個々の必要なレベルを生徒個々に合わせて教えていくことが必要だろう。

ICT 機器を使って「何を」「どのように」教えるのか、ということよりも「なぜ」私たちは授業を行っているのか、ということを考えなくてはならない。そして、「なぜ」を達成するために、変わっていく社会に応じて私たち自身を日々アップデートしていこうではないか。

(向上高等学校 教諭)